摩天楼群像 33

〝感動〟をコーディネート

ボランティア団体代表 日野紀子さん（36）

はつらつとした表情に赤いTシャツがよく似合う。胸には「NY de Volunteer」（ニューヨークでボランティア）のロゴ。ニューヨークに在住する日本人約600人、米国人100人が登録する州認可の非営利団体の代表を務めている。

活動は幅広い。市内の公立学校の美化活動、米中枢同時テロ犠牲者追悼の灯籠（とうろう）流し、虐待を受けた子供たちが暮らす施設や老人ホームへの訪問、文化紹介ボランティアでは仲間を募って「よさこい」を披露したこともある。

「ボランティアというと自己犠牲とか献身とかそんなイメージが強いけれど、一歩踏み出せば何も特別なものではないことが分かります。授業の後の掃除のようなもの」と笑う。

日本にいたころビデオで見た波打ち際に大きな観覧車が回るニューヨーク郊外の遊園地、コニー・アイランドにあこがれていた。

10年前、実際に訪れて目にしたのは行楽地として栄華を極めた後のもの悲しさと、ごみまたごみの山だった。耐えられなくなってごみを拾いはじめたが、見ていた人からは「お金にもならないのに」と冷たい言葉をかけられた。1時間ほどすると遠巻きに見守っていた1人の女性がごみを拾い始めていた。

「遠くからお互い手を振り合ったとき、心の中で何かがつながった気がしました」

自宅に戻る地下鉄のなかで「みなでおそろいのTシャツを着て活動すれば何かもっと広がるのでは」と考えた。

ウェブ制作会社で働く傍ら、情報や人脈を築き、2002年5月、公園美化ボランティアの40人の参加者をコーディネートしたことをきっかけに組織を立ち上げた。現在は日本から来るボランティア団体のコーディネートや旅行会社と提携したボランティアツアーの企画も手がける。

活動を通じて米国社会の深部に触れることができたという。ハーレムのストリート美化活動に参加し、街路樹の草むしりをしていたら「直接土をさわっちゃだめよ。危ないから」と注意された。ドラッグで使った注射針が埋められているからという。

気が付くと後ろに大柄な男性が怖い顔をして立っていた。「何か文句をいわれるのだろうか」と思ったら、ドスの利いた声で「ねえちゃん、ありがとうよ」と礼を言われた。

同じくハーレムの小学校で日本語や折り紙を教えるボランティアをしたときは何度も土壇場でキャンセルされた。「子供たちは楽しみにしているのだから」と苦情を言っても先方は絶対譲らない。

窓口となっていたのは同地区出身でハーバード大学というエリート女性だったが、「きっと今まで人間不信になるような経験をしてきたのでしょう。私たちに心を開こうとしませんでした。通じ合えなかったけれど、これも現実です」。

資金や人材確保など課題は尽きないが「ほんの少しヂを貸すことで相手に喜ばれる。うれしくなって、こちらこそありがとう、という気持ちになる。その感動をコーディネートできた瞬間がたまりません」。

（ニューヨーク　長戸雅子）

＝金曜日に掲載

ニューヨークならではのボランティア活動のひとつに「クラッピング・ボランティア」というものがある。

貧困地域に住む子供たちに夢を与えようと歌やダンスのオーディション・ショーを定期的に企画する団体があり、そのショーに客として参加するという活動だ。

観客から拍手を送られることで子供たちは自信と希望をもてるようになる。実際にショーのレベルは高く、年々チケットの入手が難しくなっているという。